

目次

卷頭言

改編本系類聚名義抄逸文小見

築島裕

五

鎌倉時代の口頭語の研究資料について

小林芳規

七

『梶尾御物語』備忘

柳田征司

七〇

院政鎌倉時代における片仮名文の接続詞

来田隆

九二

西方指南抄における打消の助動詞

井上親雄

二四

——連体形・已然形の用い方——

和漢混淆文の和文語の受容についての一考察

田中雅和

二二

——終助詞「かし」を中心に——

今昔物語集に於ける「速ニ」の用法について

山本真吾

二五

三卷本色葉字類抄疊字部における「——名」注記の機能

原卓志

一八五

蓮成院本類聚名義抄の「イ」本注記について

山本秀人

三三〇

天理図書館蔵
正平七年写本 『最勝王經音義』の性格

佐々木勇

二六一

——類聚名義抄諸本との比較を中心に——

仁和寺蔵後鳥羽天皇御作無常講式影印・翻刻並びに解説

花野憲道

二九五

翻刻

花野憲道

三〇三

解説

仁和寺藏後鳥羽天皇御作無常講式について……………花野憲道……………三二

仁和寺藏後鳥羽天皇御作無常講式の訓点……………小林芳規……………三三

照願寺藏 本願寺親鸞聖人傳繪 総索引稿……………金子彰……………三五

高橋富美子……………三六

金子彰……………三七

『鎌倉時代語研究』(第一輯～第十輯)索引(一)……………兵庫教育大学鎌倉時代語研究会……………三六

——文献索引・人名索引——

会員近著紹介……………四四

鎌倉時代語研究集会記録……………四七

『鎌倉時代語研究』(第一輯～第十輯)目次……………四〇

後記……………四五

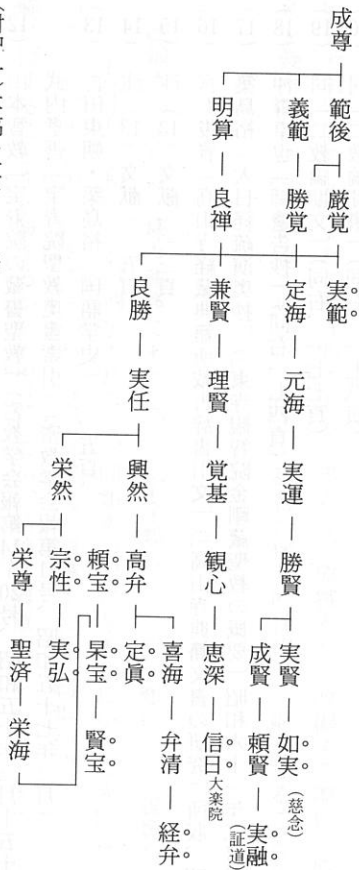
改編本系類聚名義抄逸文小見

築 島 裕

改編本系類聚名義抄については、幕末以来長年に亘つて多くの研究が積重ねられて来た。就中、昭和初期を中心とする岡田希雄氏の精緻な研究⁽¹⁾、特筆すべきものであつて、戦後、原撰本と目される図書寮本系類聚名義抄の新たな出現によつて、研究史的価値のみが注目されて、一見、その光彩を減じたかに見られた感もあるが、実は決して然らず、今日に於ても依然として客観的に高き価値を有する優れた研究であつて、後学を益する所、誠に大なるものがあることを忘れてはならないと考へる。

図書寮本の研究が精密の度を加へ、又、観智院本等との比較検討の作業が進められて、古辞書の歴史的研究は大幅な進展を遂げた。又、これら両者が、後代に於てどのやうに流伝したかについての調査も、中田祝夫博士、平岡定海氏等を始めとする研究者によつて、数多くの研究が推進された。筆者も、叡山文庫蔵本「蘇悉地羯羅經略疏」⁽³⁾、高野山金剛三昧院蔵本「大日経疏聞書」⁽⁴⁾、高山寺蔵本「菩提場所説一字頂輪王経」⁽⁵⁾などの古写本の中に、改編本系類聚名義抄の記事の引用のあることを指摘した。又、近時、東寺観智院の聖教類の総合調査に伴ひ、同経蔵の「御遺告抄」「二教論聞書」「大日経疏演奥鈔」等の中にも同類の記事が発見され、前二書については沖森卓也氏⁽⁶⁾、後一書については筆者の紹介が行⁽⁷⁾

○類聚名義抄関係眞言血脉図



(附記) 本稿を草するに際しては、東大寺図書館、高山寺、東寺関係御当局各位の御芳情、注に引用した諸先学・同学の方々の学恩による所が極めて大である。厚く御礼申上げたい。

(附記) 二稿後、「弘文荘待賣書目」第三十五号(昭和三十五年三月発行)所蔵の「最勝王經音義」一冊(正平七年八一三五二)奥書が、その奥書に「披類聚名義之書、籍注最勝王經之音訓・仲甚」とあり、卷首・卷末の写真によると、改編本系名義抄の音訓と致・類似する所の多いことに気付いた。南北朝時代にはこのやうな形態でも展開したことを知つたので附言する。

鎌倉時代の口頭語の研究資料について

小林芳規

目次

- 一、はしがき
- 二、延慶本平家物語の会話文の用語
- 三、延慶本平家物語における中世語法
- 四、口頭語史料としての鎌倉時代語文献の選定

一、はしがき

鎌倉時代の言語を総合的に記述しようとする場合、それぞれの文献の性格とその差異を考慮せずに、いわば手当り次第に身近かの文献を取上げて個別的に記述し、その積算を以て足れりとするならば、雑駁の誹りを免れ得ないであろう。さりとして、個々の文献の記述に止まっていたのでは、時代語の全体像が見えて来にくい。

文献の性格の差異に配慮することは、鎌倉時代には限らないが、この時代は、いわゆる言文二途に別れ、書き言葉と話し言葉の間に開きが大きくなり始めるとされるから、その面からの配慮が必須となってくる。

この時代の文語については、既に二氏による成書⁽¹⁾があつてそこで言及されているし、当代の漢籍の訓点資料の訓読語